



城東図書館 2023年8月18日～9月20日実施

まちのひと 吉村 悟さんの紹介本リスト

城東区長

海外短波放送を聞こう	金子 俊夫、小林 良夫／著	日本放送出版協会
<p>きっかけは中学1年生の3学期のある日だった。同級生が持っていた不思議なアルファベットを記したノートに関心を示した私に、彼はそれはキリル文字というもので、海の向こうから届くラジオ放送のロシア語講座を聴いてまとめたものだとか教えてくれた。海外短波放送なるものを初めて知り、そのエキゾチシズムに心を震わせた私は、ふと立ち寄った本屋でこの本を見つけ、乏しい小遣いに悩みつつ、それでも最後は覚悟を決めて購入した。そして、それこそが世界に目を向ける怒涛の旅路の始まりとなる。</p> <p>インターネットもSNSもない冷戦真っただ中の時代、当時知り得る海外の情報といえば、テレビや新聞を通じた欧米のニュースや映画・音楽ぐらいだった。そんな中、中学生の私にとって、異国からの電波に乗ってダイレクトにやってくる未知なる空気とその香りは、新鮮などという客観的な言葉で語れないほど、もっと官能的な質感と温度を伴って私の体内に流れ込んできた。とりつかれたように知識を貪り世界への興味を高め、日本のメディアが報じない東欧やアジア・アフリカ諸国の娯楽や生活を知るにつけ、そこで学んだのは文化の多様性と価値観の相対性であったように思う。あの日、本書を買う決断をしていなければ、私の人生は現在と大きく異なったものになっていただろう。</p>		
ベトナム戦争	松岡 完／著	中公新書
激動の東欧史	木戸 蕪／著	中公新書
<p>「歴史」という積み重ねの先端に「現在」があり、すなわち我々が今立っている地表から見る景色は、そんな足元の地層によって形成されている。そう考えれば、より近年の地層を知ることは、自分が生きるこの時代を簡捷に理解することになるだろう。その視点から、多くの場面で私の関心は世界の近現代史に向けられてきた。それは歴史そのものを理解したいというよりも、それに連なるこの現在の世界を把握したいという思いかもしれない。</p> <p>この二冊が対象とする事象は、地勢的には限定されたエリアであるものの、直接関与した国や波及的影響を受けた国が実に多岐にわたる点で、如実に今日的な国際社会の態様を示唆している。実際に見聞した国々をさらに理解したくてこれらの書物を手にとったが、今なお経済的、政治的に激変し我々に多大な影響を与え続けている状況を見るにつけ、新たな地層が作り続けられている地殻変動とその地表で自分がリアルタイムで生きていくことの生々しさを感じずにはいられない。</p>		
亡命ロシア料理	ピョートル・ワイリ、アレクサンドル・ゲニス／著 沼野 充義、北川 和美、守屋 愛／訳	未知谷
<p>学生時代、シベリア鉄道など陸路でユーラシアを横断し、ロンドンから帰ってくる旅をしたことがある。ソ連の終焉前夜、ベルリンの壁崩壊の直後のことだった。そのソ連が誕生する70年ほど前、多くのロシア人たちが私と同じようなルートを辿って西欧に亡命したが、ナボコフやブーニンといった亡命作家たちが拠点としたベルリンやパリの街並みを歩いていると、一旅人の無責任な感慨とは言え、故郷を捨てざるを得なかった彼らの寂寥と権力の無常を思い起させる。</p> <p>本書は1970年代にアメリカに亡命した二人のジャーナリストによるもので、その内容もレシピ満載の料理本と思いきや、故国に対する愛憎半ばする感情を料理に託して綴った機知に富むエッセイであり、皮肉の効いた文明批評である。そういえば、先に掲げた亡命作家の小説にも食事のシーンがあった。喪失を重ねてきた人にとって、「ものを食らう」という根源的・本能的な行動からもたらされる思索は、自ずと郷愁や追憶を伴うものなのかもしれない。</p>		
ひまわりーヴァン・ゴッホに捧げる	デイヴィッド・ダグラス・ダンカン／著	造型社
<p>印象派を好んだ美術教師の父の影響か、大和川近くの生家周辺に咲き誇っていた思い出の残像か、私はヒマワリが好きである。そしてこの花の本質は、幼児がクレヨンで豪快に描く絵のように奔放でカラフルで能天気なところにあるはずだ。ところが、そんな屈託のない単純明快さを苦手とする日本人気質の中で、この花もなぜか往年のイタリア映画の愁情やゴッホの悲劇性と共に語られ、結果的に夏の終わりの寂寥感だけが喧伝されている。そうではない！この花を不当に貶めてはならない！横溢な生命力と邪気の無さこそが称えられるべきなのだ！だから私はひまわりではなくヒマワリと表したい！！</p> <p>かくなるヒマワリの天真爛漫な姿を期待して、私はこの著名な報道写真家の手による写真集を買い求めた。副題にもあるように、ゴッホへのオマージュとしてその魂をなぞるように南仏のひまわりが活写されていく。その多くはやはり「感傷」を纏っているのだから、私の期待する稚気だけが充満しているわけではなかったが、それでもページ一面の大輪のアップなどはそれだけで笑顔を誘うものだった。</p> <p>ある日、ふと気づくとこの本が自室の書棚から消えていた。大きさも重さも相当なものであり、そのへんの雑誌や古新聞に紛れ込むような代物ではない。家じゅうをあちこち探してみると、父がさも我が物であるかのように自らの書棚の一等場所を保管していた。「美術の画集でないのはわかっている。でもこの本がここに来たいと言ったんや。」うーん、まあいいか。</p>		

ころ	夏目 漱石／著	新潮社
<p>漱石の『ころ』と太宰の『人間失格』を読まずにおれないのは、青春の通過儀礼のようなものだろう。私の所有する新潮文庫版の『ころ』は1983年1月の94刷だが、1957年に発行されて以降すでに200刷を超えているというから、どんな時代であってもこの小説は若い人々の琴線に触れるのだと思う。高校時代、10歳ほど年上の国語の先生は本を読み終えるたびにその日付を小さく記入するのを習慣にしていたらしいが、「先日数えたら、『ころ』は20回を超えていましたねえ」としみじみ語った授業風景は今も心に残っている。</p>		

フランケンシュタイン	メアリー・シェリー／著 森下 弓子／訳	東京創元社
<p>英文読解の授業で対応に苦慮した学生たちが日本語の訳書を買求めるのはよくある話。そんな不純な動機で手にした一冊が大きく魂を揺さぶるものになるうとは。</p> <p>マッド・サイエンティストが作り出した巨躯で奇怪なバケモノが暴れ回るホラー小説という刷り込みは恥じなければならない。被創造物である「怪物」を通して本作で描かれているのは、高度な知性や繊細な感情を持ったが故の苦悩、すなわち生きることの渴望であり、他者から愛されることの希求であり、そしてそれが叶わぬことへの絶望と孤独である。そこに多くの読者は「怪物」に感情移入し、ことごとく社会から忌避される「怪物」の疎外感もまた現代人に通底するものであるように思われる。</p> <p>もちろん、本作はいわゆる教養小説ではない。「怪物」を創造したフランケンシュタインの苦悩は科学者としての傲慢な探求心の結果だが、その野心を自省しつつ自らをどん底へ突き落した「怪物」と対峙する決意を宣言するクライマックスは、実に冒険小説的な要素を感じる。そしてその決着の行く末を読者にすべて委ねているところも、科学と人間の深い相克を示唆しているようで、我々の想像力が試されているような気になる。</p>		

大阪市立城東図書館

大阪市城東区中央3-5-45 06-6933-0350

<https://www.oml.city.osaka.lg.jp/>